学 会 名	リハビリテーション・ケア合同研究大会2023
研究テーマ	家族を含めたチーム医療の実践により食物認知困難であった重度脳卒中患者が3食経口自己摂取・自宅退院に至った経験
病 院 名	医療法人社団健育会　竹川病院
演　　者	○遠藤結香（ST） 姫田大樹（OT）　大工原良太（PT）成枝望（Ns）永田友子（CW） 武井瑞穂（MSW）海野太一（Dr）

概　　要

【はじめに】2022年度診療報酬の改定により回復期リハビリテーション病棟の重症度割合は引き上げられ重症患者が増加している中、COVID-19流行により家族面会が制限され支援の困難さに直面した。今回面会制限がある中でも家族を含めたチーム医療の提供により重症患者が自宅退院に至った経験を報告する。【症例紹介】50代女性。右視床出血。GCS9点（E4V1M4）。発声発語はなく、左上下肢の麻痺、重度左半側空間無視によりFIM18点。食事は食物認知困難で3食経鼻経管栄養。家族は自宅退院希望。夫と2人暮らし。【経過】入院直後から直接練習を開始したが食物認知が出来ず、摂取困難。その他の反応も得られなかった。しかし初回面会時、家族を追視したことから興味関心のある刺激入力を開始。医師、医療相談員が家族とより密に連携し、病前症例が好きだった活動や食べ物についてチームで共有した。家族持ち込みによる食品は自発的に開口、嚥下動作が行われ、以降3食経口摂取へ移行。療法士が食事環境の調整を行い、自己摂取を獲得。GCS14点（E4V4M6）、FIM31点となり、夫へ介助指導し自宅退院へと至った。【考察】本症例は思い出の味をきっかけに食物認知が改善し意識レベル向上、経口摂取へと繋がった。また面会頻度が少ない中、家族の思いが伝わる関わりをしたことやチームで計画的に家族教育を行ったことが重症例であっても自宅退院を実現できた要因と考える